



知の抒情歌人

高嶋健一

小畑庸子

新
歌人群像

「水甕」最年少同人

高嶋健一たかしまけんいちは昭和四（一九二九）年四月十四日、兵庫県神戸市に生まれた。幼少の頃より病弱であったため、同加西郡賀茂村（旧）の親戚にて単身で転地療養した時期があった。第二歌集『草の快樂けらく』に、

親戚を強要されし幼き日を一つの瘧の
ごとと思ひ出づ

があり、彼にとってこの一時期は、長く傷みを伴って心に深く埋められていたのである。

昭和二十一（一九四六）年に「水甕みずがめ」に入社した。同二十八年には広島文理大学教育学科を卒業、専攻は心理学である。その時期すでに「水甕」同人となっていた彼は、松田常憲のり・加藤将之まさゆき・熊谷武至むかいたけしらに師事し、最年少同人として囑望される存在であった。

同年、当時の主要同人であった西藤優・山崎照子・築谷三郎・林秀子との共著歌集『甲南五人』を出版する。その〈青い系譜〉一連に、二十代の高嶋短歌を見ることができると

浅川の底ひの砂が階なして崩るること
く流されてゆく

昭和24年

曇りつつ午後となるとき窓近く褐色の
壁塗られてゐたり
同28年

厳肅な儀式のごとく近づいて二つの電
車すれちがふいま
同29年

物象・事象が鮮明に掬いとられ、リアルな
タッチで若々しく歌い上げられている。

昭和三十三年、当時の水麿選者犬飼武の三
女令と結婚、静岡に居を構え、晶、純の二人
の息女に恵まれ幸せな日々を送る。

知の抒情

昭和四十年十一月、片山静枝・近藤秀臣・
島田修らと同人誌「壘」を創刊する。〈創刊
のことば〉で高嶋は、前衛短歌と伝統短歌に
ついての意見を短く述べ、そのどちらにも与
することなく、自らの生命の証として、自ら
の方法で詠もうと決意する。三十代の、まぎ
れもない高嶋短歌〈知の抒情〉がここにある。

風の日の風速計にかがみこむ少年 冬
の内部への挫折
「壘」
冥々となりて灯の下立ちあがるわれを
めぐりて遠き喝采

ゆるくゆるくスプリングラーのめぐる
のみ深夜の凍魚ら秩序を待てり

昭和四十二年静岡女子大学助教授に、四十
四年には同学教授となる。「冥々と」の作品
には、自らに対するシニカルな視線があり、
高嶋に内在するネガティブな部分が伝わる。
昭和五十一年「水麿賞」を受賞、その二年
後に同選者となり、第一歌集「方嚮」（不識
書院）を出版する。

降りゆく鉄骨階段 唐突に折れてそこ
よりひらける奈落
「方嚮」
立ち上りつつ沈みつつ青き壘川のもの
かを流れて行けり

四十代という人生の半ばにさしかかった男
性の、不安と焦燥を垣間見る思いがする作品。
昭和五十七年には、歌集「草の快楽」（不
識書院）を出版し、これによって第十回日本
歌人クラブ賞を受賞する。

日光のみなぎらふ坂のぼりつめ吾に見
え来し無残は言はず
「草の快楽」
漂ふは神のみならずひらひらとまひる
ましろき坂くだりたり

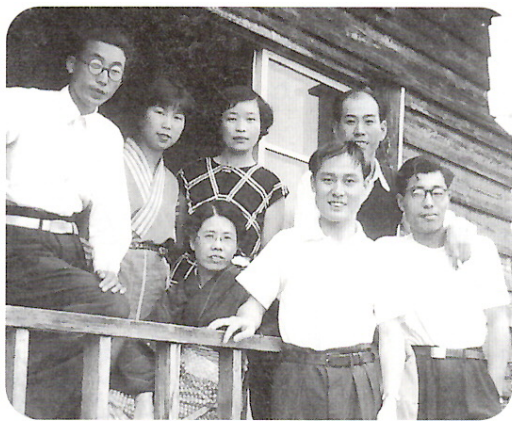
健一五十代の作品である。

自身をふりかえるとき、二十歳代にはア
ラギの歌人の作品を詠み、写生を勉強
したが、そこから脱出し、写生を自分の
表現とすることを考えた。

と当時の「水麿」誌に述懐し、「漂ふは神の
みならず」の作品を「写実を方法とした歌だ
と思っている」と自解した。これは高嶋独自の
〈知の抒情〉と言えるのではないだろうか。

ポスト・モダン

昭和六十二年「水麿」運営委員長に就任し、
翌年、第三歌集「中遊」（不識書院）を出版。



「水麿」甲南支部のメンバーと六甲山研修旅行で。
一番手前が健一（1949年）



京都・銀閣寺で、令夫人と (1996年)

人噛みて小舎より出でぬ老犬にただ濃
密に経つ時間なれ
軀をめぐる迷路ある日のポケットより
朝顔の黒い種も出てくる

『中游』

など、物に即した作品が多く収められている。この歌集については、当時ポスト・モダンすなわち脱モダニズム、脱近代の作品としての位置づけがなされた。しかし、彼自身には、『中游』以前の作品がモダニズムであったと

いう意識は無く、むしろそのような事とは無関係なところで自らの作品の変化を認めていた。

平成二（一九九〇）年、『中游』以後の二年間の作品を収めた『存疑抄』は高嶋健一の第四歌集である。このあとがきは、これまでの三冊の歌集に比較して、極端に短いものであった。

此の時期、私の心は平らかではなかった。昨秋の『中游』にひきつづいて本歌集を上梓したのは、歌集をまとめることによつて自らの位相を確認したいと、切願したからに外ならない。

位相は数学上、理學上の用語であるが、高嶋の意図したところは、作品を自ら解析し、それを自らの手で位置づけることであつたと思う。『中游』がポスト・モダンとして評価された事へのいささかの反論であつたのかも知れない。

この何年か後に開催された「水鏡」全国大会でのことである。高賞として出席者の多くが選んだ作品は、どちらかと言えば理解し易く、それゆえに通俗的で文学性に乏しいのはどこの結社にもよくあることである。しかし、その作品が複数の選者によつても採られていたという事実を、高嶋は深く憂慮した。

大会の壇上から罵るごとく怒りの言葉を投げつけた。「選者がこの作品を採るなど、あつてはならないことだ」という厳しい口調は、いまだかつて聞いたことのない力強さと鋭さをもった悲痛な叫びとも受けとれた。そしてそれは、その後再びは聞くことのない叫びでもあつた。

授業と短歌

平成七年、高嶋は静岡県立大学を停年退官する年齢となつていた。仕事の上では授業研究が好きであつたので、授業と短歌をドッキングさせることを試みた。その事実がラストレクチャーで語られた。

たちまちに涙あふれて夜の市の玩具売場
を脱れきにけり 木俣 修

を板書し、作者はどんな人と思うかと質問する。長く考えたのち一人の男生徒が、「間違っているかも知れないけれど、若いお父さんだ」と答える。正解が出たら授業にとつては最も危険と解つていながら、女生徒の「二十歳くらいの女の人が、売られてゆく人形の運命をはかなんだ歌」という意見に深く関わつてゆかなくなつたことが悔やまれる。この意見にこだわ



「水薺」の全国大会で。前列右より筆者、健一（1997年）

つてゆけば、当然「若いお父さん」と感じた理由へ結びつき、この一首が女歌ではなく、男歌の調べであることに辿りつけた筈だ。ここでもう一步追求できなかった悔しさが残る。

というものである。高嶋の短歌への情熱は、教育の現場にも燃やされ、生かされた。

平成十一年三月十四日、静岡県清水市（旧船越堤公園・せせらぎの小川に、高嶋の歌碑が建立された。碑の作品は、第一歌集『方嚮』の

てのひらのくぼみにかこふ草螢移さむ
としてひかりをこぼす

で、少年と少女の美しいシルエットが一首から立ち上る。

短歌への執念

平成十二年、「短歌研究」誌登載の「日常」一連により、第三十六回短歌研究賞を受賞する。平成十四年には、「存疑抄」以後十二年間の作品を収めた『歴日』と『巨薺』の姉妹歌集（不識書院）と、歌集『存命』（短歌研究社）が、三冊立てつづけに出版され、『存命』は第十回短歌新聞社賞を受賞した。

冷蔵庫の内部白々と閉ざしたるのち一
ひらの遺書を嚙下す

うづくまる明けの庭土冥く冥く尻尾残
して去りゆけるもの

的確に屑籠に入りし紙くづがかさと最
後の音聞かせたり

この慌しいばかりの歌集出版へ、高嶋を突き動かしたのは何であったのだろうか。平成十五（二〇〇三）年五月十八日、七十四年

と一か月余の生命は敢なく終わった。

「短歌研究」誌に発表されるべき連載作品の三十首は、病床にて死の間際まで作歌された。原稿の解読のために受けとった四校の原稿用紙には、判読し難い文字が列なっていた。高嶋の短歌に対する執念が、文字となつて訴えてくる気がした。

平成十六年二月、高嶋健一第八歌集『揺蕩』は、最後の病床詠「再々々入院」一連三十首を巻末に置き、二女高嶋純によって短歌研究社より出版された。

巻けやウインチ巻け巻けジャンジャン
遠き神戸の港まつりが今なほ顕ちて

咳き込みの幾日つづきて右胸の筋肉痛
に耐へがたくるる

病室の時間ゆつくり過ぎゆきて夜がまた
長し眠られぬまま

病室のベッドに父を呼び出して詫びて
るわが死期近からむ
心映え早失せゆきて月越ゆる再々々入院の重きしむら

（おばた・ようこ「水薺」選者）